

# 土着の自然とかかわる中で形成されるもの： ネイティブ・プランツを育てるヨーロッパ系オーストラリア人

前川真裕子

## 1. はじめに

本論ではオーストラリアにおけるマジョリティ住民たち、すなわちヨーロッパ系オーストラリア人たちがもともと他者の所有していた土地であるオーストラリアと、どのような関係性を築いてきたのかに焦点をあてて考察する。オーストラリアにおけるマジョリティ住民は、アングロ・ケルティック系オーストラリア人を中心とした、ヨーロッパに出自を辿ることができる人々のことである。近年ではアングロ・ヨーロピアンとも呼ばれている人々であるが、本論では「ヨーロッパ系オーストラリア人」と総称し議論を進めていきたい。本論で特に注目したいのは、オーストラリアに固有の自然環境を生み出しているブッシュの自然およびネイティブ・プランツ(native plants)と呼ばれる土着の植物である。ヨーロッパ系オーストラリア人がヨーロッパとは異なる自然と接触する過程で形成してきた自己と他者に対する認識について考察する。

## 2. ヨーロッパ系オーストラリア人たちとオーストラリアの自然

本論で取り上げるネイティブ・プランツとは、オーストラリアに固有の植物のことを指す。日本でも知られているオーストラリアの代表的なネイティブ・プランツにユーカリ(Eucalyptus フトモモ科ユーカリ属の総称)、ワットル(wattle アカシア属の総称)、ティーツリー(Tea tree フトモモ科コバノブラシノ属のオーストラリアにおける総称)などがある。ネイティブ・プランツはオーストラリアに独自のブッシュ(bush)と呼ばれるランドスケープを作り出してきた。イギリス英語やアメリカ英語でいうところのブッシュは主として低木を中心とした草木の茂る土地のことを意味するが、オーストラリア英語で意味するところのブッシュは同国内陸部の特異な環境を指す言葉でもある(有満2003: 215)。オーストラリアの先住民であるアボリジナルの人々(Aboriginal peoples)にとって心の拠り所となってきた祖先の物語が継承される場所であり、同時にヨーロッパ系オーストラリア人たちにとっても国民的神話の数々が生み出されてきた特別な場

所である。オーストラリアにおいてブッシュとは同国に独自の自然が育まれてきた場所であると共に、様々な人々の集団的なアイデンティティの源泉となってきた場所なのである。

しかし、ヨーロッパからやって来た入植初期の人々にとってブッシュは馴染みのない不気味な草木の茂る場所であった(前川 2007:20-37)。イギリスからやって来て後にオーストラリアの国民的作家となったマーカス・クラーク(Marcus Clarke, 1846-1881)は、1876年にオーストラリアの風景の特徴を紹介する一節を書いている。クラークはその中でオーストラリアのブッシュを「不気味な憂鬱」(“weird melancholy”)と表現したことで有名である(Clarke 1876: v; Wilding 1997:9)。彼は自身が暮らしたメルボルン郊外に広がるオーストラリアの自然を、エドガー・アラン・ポー (Edgar Allan Poe, 1809-1849) の小説さながらにグロテスクだと表現する(Clarke 1876: v)。さらにクラークは、山々は不気味な叫び声に満ちており、ジョン・ミルトン(John Milton, 1608-1674) の「快活の人」(“L’Allegro”)のような美しい詩はオーストラリアでは書くことはできないだろうと言うのだった(Clarke 1876: v-vi)。クラークのような入植者にとってオーストラリアのブッシュは乾燥が激しく植物の育たない荒涼とした大地であり理想の自然とはならなかったのである。そこで初期の入植者たちは自分たちに馴染み深いヨーロッパのランドスケープをオーストラリアの中に作り出していった。1836年にオーストラリアへやって来たジェーン・ウィリアムズ(Jane Williams)というイギリス人女性は、訪問先のタスマニアの農場がイギリスの田園かと見間違えるほどに英国的であったことを書き残している(Boyce 2009:214)。オーストラリアの入植者たちがタスマニアに再現してみせたような英国的な風景は、現在でもなお一部のヨーロッパ系オーストラリア人たちに理想の自然として親しまれている。

オーストラリアの歴史家であるトム・グリフィス(Tom Griffiths)によると、マーカス・クラークに代表されるような人々がオーストラリアの自然を「憂鬱」と認識する中で、20世紀初期になるとブッシュの自然へ積極的な関心を示すヨーロッパ系オーストラリア人たちも現れた。グリフィスはヨーロッパ系オーストラリア人たちが土地との感情的で精神的な結びつきを創り出すなかで、本来ならば持たないはずのオーストラリアとの繋がりを生み出してきた歴史を描き出している。特にグリフィスはヨーロッパ系オーストラリア人たちが植民地主義の暴力的介入を隠蔽したまま、オーストラリアという土地と深く繋がるアボリジナルの文化的諸要素を部分的に切り取り自分たちの文化の中へ編

入してきたことを批判的に捉える(Griffiths 2009: 173)。グリフィスはそういった姿勢を、ヨーロッパ系オーストラリア人たち自身がオーストラリアという土地の「アボリジナルになる」(“becoming Aboriginal”, 6)ためにおこなってきたことであると考え、それを「白い先住民の文化」(“white indigenous culture”, 173, 175)と呼び問題視するのである。

例えばグリフィスは 1930 年代に活躍した詩人のグループに注目している。この詩人のグループは自分たちの活動のインスピレーションをアボリジナルの文化から借用した幾つかの要素に求めた人々である。詩人たちが活動の中で重視したのはヨーロッパの追従とならない作品を生み出すことであり、そのモチーフにオーストラリアに独自の自然が選ばれると共に、その自然を深く理解するアボリジナルの人々が重視されたのである。この詩人のグループは自分たちのことをアボリジナル風の名である「ジンディウォロバック」(Jindyworobaks)と呼び活動を進めていった(174)。また、メルボルンでオーストラリア内陸部の自然を紹介する活動をしていたボブ・クロール(Bob Croll)は、当時まだ入植者たちの手がそれほど及んでいなかったオーストラリア大陸内陸部へ強い関心をもった人物である。クロールは 1929 年からの 10 年間に大陸内陸部への 6 回の探検を敢行したことで有名だが、彼は芸術家や科学者を同行しては荒漠とした自然の広がる大陸中央部へ向かい、自身のオーストラリアに対する愛着を深めていった<sup>1</sup>。そのクロールは死の間際に、「自らの生まれ故郷である土地への愛はなんとも深いものであろうか、そういう意味で私は一人のアボリジナルである」と書き残している(175)<sup>2</sup>。クロールや詩人たちはオーストラリアという土地に対する探究心を満たす過程で自分自身をアボリジナルの人々になぞらえたのである。

その他にも 20 世紀初期のオーストラリアでは各地で様々な団体や運動が生まれ、オーストラリアという土地とヨーロッパ系オーストラリア人たちとの繋がりが創造されていった<sup>3</sup>。ヴィクトリア州では「メモリアル・ムーヴメント」(memorial movement)と呼ばれる運動が盛んに行われるようになり、百を超える数の石碑や彫像が建てられ、探検家たちの功績と共にその土地がどのように開拓されたのかという入植者たちの歴史が刻まれた(Griffiths, 158)。この運動はヨーロッパからやって来た人々にオーストラリアという新たな土地で自分たちの歴史を創出していく意識を目覚めさせるものであり、ナショナルな価値が土地をめぐる歴史の認識と共に生みだされていったのである(Griffiths, 158)<sup>4</sup>。

エレイネ・サーウォンカ(Allaine Cerwonka)はグリフィスの議論を慎重に受け止めつ

つも、フィールド調査をもとにヨーロッパ系オーストラリア人の土地への関わりを別の角度から描きだしている。サーウォンカはグリフィスの言う「アボリジナルになる」という概念を妥当なものであるとし、ヨーロッパ系オーストラリア人の「白い先住性」(White indigeneity)を批判する(Cerwonka 2004: 148-149)。しかし一方で彼女は、現代を生きるヨーロッパ系オーストラリア人たちがガーデニングを通して周囲の自然と関わる様子を考察し、それらの人々とオーストラリアの自然をめぐる新たな側面を描き出した。サーウォンカが調査をおこなったのはメルボルンのなかでも長らく英国的なコテージ・ガーデンが好まれてきた中産階級の人々が暮らすイースト・メルボルンと呼ばれる地区である。彼女はその地区にあるガーデン・クラブに通いながら、ガーデニングに熱中する人々が庭を通しておこなってきた空間づくりを調査した。

特にサーウォンカが聞き取り調査を進める過程で興味をもったのは、ガーデン・クラブに所属している人々が1970年代にオーストラリアでおきたネイティブ・ガーデン・ムーヴメントについて語る様子である。彼女のフィールド調査は2000年代のものであるので、およそ30年ほど前の事項について語っていることになる。1970年代のオーストラリアでは英国偏重的な政策が見直され、国際社会における新たな立ち位置が模索され始めていた(竹田 2000:215-216)。政治家ゴフ・ウィットラム(Gough Whitlam)の登場で多文化主義へと大きく転換してゆくのもこの頃である。有識者の間では英国の君主を頂点におく立憲君主制を改め、オーストラリアの独自性をめざす共和制への移行が熱心に論じられてもいた(McKenna 1996 :237)。ネイティブ・プランツなどブッシュに固有の自然に対する関心も、こういったオーストラリアに独自の路線を模索する社会的背景の中から生まれたのである(Cerwonka 2004:111-112, 125)。サーウォンカが懇意にしていた女性のガーデナーは、ネイティブ・ガーデン・ムーヴメントをきっかけにそれまで人気のあったヨーロッパの植物が存在感を失い、多くの人々がネイティブ・プランツの栽培に熱中し出したことを少し「狂信的だ」(“fanatic”)とみている(124)。このガーデナーはネイティブ・ガーデン・ムーヴメントを皮切りに現在でも多くの人々がネイティブ・プランツにのめり込んでいる様子を、自分たちの国家に対して強い執着心をもった人々が植物を通して自分たちの愛国心を表現しているのではないかと否定的にとらえている(125)。

サーウォンカは、このガーデナーに代表されるガーデン・クラブの人々をブッシュの自然に特化した自分たちのオーストラリア人として土着性を創造するようなナショ

ナリストックな空間作りを目指す人々ではなく、すでに周囲に存在している様々な植物から構成されたヘテロピックな空間作りに勤む人々であると結論づけた(126-129, 149)。サーウオンカはグリフィスの議論の妥当性を認識しながらも、現代を生きるメルボルンのガーデナーたちが、英国的な空間に執着しすぎるわけではなく、だからといって「アボリジナルになる」ための空間作りに熱中するわけでもない、柔軟な土地との関係性を築いている様子を分析してみせたのである。

本論ではグリフィスとサーウオンカの議論をそれぞれ部分的に踏襲しながらも、両者の分析からは十分に考察されていない点を論じていきたい。すなわち、現代のメルボルンでオーストラリアに固有の自然に強い関心を示す人々の活動がグリフィスが批判したような「アボリジナルになる」といった植民地主義への無批判な眼差しからくるものではないこと、およびそれらの人々は必ずしもサーウオンカのガーデナーが考えるような狂信的なナショナリストでもないということである。以下では上記の点について考察を深めながら、ネイティブ・プランツにかかわる活動に従事しているヨーロッパ系オーストラリア人たちの現地調査を踏まえて、ヨーロッパ系オーストラリア人がオーストラリアの自然と関わるなかでどのような自己と他者の関係性を築いてきたのか考察を深めたいと思う。

### 3. 養苗センターAとメルボルンのネイティブ・プランツ

前節で論じたように、ヨーロッパ系オーストラリア人とオーストラリアの自然との関わりは長らく注目されてきた。筆者はそうした問題意識のもとに、2017年よりネイティブ・プランツに関わる活動をしている人々に対しての現地調査を行ってきた。フィールド調査地として選んだのはヴィクトリア州のメルボルンでネイティブ・プランツを専門に養苗と販売をおこなっているセンターである。本論では仮名として「養苗センターA」と呼びたい。本節ではまず養苗センターAを紹介すると共に、人々がどのようにオーストラリアの自然へ関わっているのかを紹介していく。

養苗センターAはメルボルンの中心部から車で30分ほどのところに位置する森林地区内にある。この森林地区は多くの近隣住民が訪れる憩いの場である。誰でも無料で立ち寄ることができる。ジョギングコース、フットボールの競技場、そしてゴルフ場などが併設されており、毎日さまざまな人々が地区内を行き来している。大きな川が流れておりボートハウスが併設されているのも特徴的である。森林地区周辺には

バスの停留所が一つあるので、頻繁にバスの遅延が起こるものの、メルボルンの中心部からのアクセスもそれほど不便ではない。バスの停留所を降りてから養苗センターA までの道のりは徒歩で約 25 分程度である。また、この森林地区は 1877 年に保護区に指定された地域でもある。もともとはウランジェリ(Wurundjeri)という集団に属すアボリジナルの人々が居住していた地域である。しかし残念ながら現在ではこれらの人々が生活したその痕跡を探すことは難しくなっている。

養苗センターA は 1980 年代半ばに誕生した。ネイティブ・プランツを広めるために作られた協同組合 (cooperative) である。当初から現在にいたるまでネイティブ・プランツのみを栽培して販売する団体である。協同組合ということから特定のビジネス・オーナーは存在しない。その代わりに養苗センターA の人々が「非常勤取締役たち」(Non-executive directors) と呼ばれる幾人かの人々によって監督されている。養苗センターA ではこれら取締役の人々に 2 ヶ月ごとの経営状況の詳細を報告している。ちなみに非常勤取締役たちの中にはボランティア・ワーカーとして養苗の作業を手伝っている人もいる。最も大きな取引先は地方自治体である。その地方自治体との取引は全体の約 7 割を占めていると言う。その他の得意先は、ネイティブ・プランツを売る一般の小売業者、近隣の学校、養苗センターA にネイティブ・プランツを買いに来る近所の人々である。売り上げは日本円を 1 ドル(オーストラリアドル) 80 円と計算して 4000 万円ほどになる。メルボルンには幾つかの養苗センターがあるが、他のセンターと比較した場合の養苗センターA の商売規模はちょうどミディアムサイズの中規模センターであるという。

養苗センターA の責任者はマネージャーの M 氏という 50 代の男性である。彼はドイツ人とイギリス人の両親のもとオーストラリアで生まれ育った。幼い頃からブッシュの自然やネイティブ・プランツに興味をもっており、はじめはボランティア・ワーカーとして養苗センターA の活動に参加するようになった。彼がそれまでの職を辞めて養苗センターA で有給職を得たのは 2001 年からのことである。養苗センターA で働く人々はどの人も子供の頃よりブッシュの自然やネイティブ・プランツに強い関心があったと言う場合が多い。

M 氏を例にあげると、彼が自宅の庭に初めて「自分のガーデン」をつくったのは 7 歳か 8 歳の頃であった。ドイツからの移民であった祖母の影響を受けたのである。M 氏は祖母の家を訪れるたびに、彼女が庭で熱心に栽培する様々なヨーロッパの植

物に親しみ、ジャムなどを手作りしている様子を見て植物を育てる楽しさを覚えていった。そのM氏がネイティブ・プランツそのものに興味を持ち始めたのは10代に入ってからのものである。ちょうど1970年代のことであった。先述したように1970年代といえばオーストラリアでネイティブ・ガーデン・ムーブメントが起きた時代で、M氏も子供ながらに社会の変化を感じ取ったと言う。M氏はイングリッシュ・セントリック(English centric)という言葉を使いながら、英国的なライフスタイルに価値をおいていた大人たちが、ライフスタイルも含めて日常のさまざまな場面でオーストラリアらしいものを追求していく様子を記憶していた。植物に関しても同様で、イギリスで園芸品種として改良されそれまで高く評価されていたバラ、ツバキ、サンザシから、土着の植物であるネイティブ・プランツに脚光が当たりはじめたと語る。M氏はこのような社会の変化をうけて少しずつネイティブ・プランツへの興味を持つようになった。

ところがM氏が10代を過ごした1970年代のオーストラリアでは、現在のようにブッシュの自然について専門的に学ぶことができる教育機関が整備されておらず、取得できる専門資格も限られていた。そのような状況の中でM氏はもともと植物とは関係のない職についた。M氏はネイティブ・プランツに関する知識を幾つかのブッシュ・ウォーキングの会に参加するなどして独自に習得して勉強を続けた。そうした学習の過程で養苗センターAでのボランティアを始め、その後には有給職に就くチャンスを得て現在に至っている。

養苗センターAではネイティブ・プランツの販売を行うと共に植付けなども手がけているが、その活動の中で最も重視されるのは植物の選定、採取、養苗である。特に養苗センターAで販売するためのネイティブ・プランツの選定と採取は細心の注意が払われる作業と言える。N氏(女性)はM氏と共に養苗センターAで中心的役割を担っている人物で、養苗センターAで働く人々のなかでもメルボルンに特有のネイティブ・プランツに強いこだわりがある。彼女は40代のヨーロッパ系オーストラリア人で、祖父母がアイルランドやスコットランドからやって来た移民である<sup>5</sup>。N氏のネイティブ・プランツに関する知識は深く、どの植物がメルボルンに特有のものであるのかを熟知している。養苗センターAでは彼女を先頭にボランティア・スタッフたちが定期的に森林地区内を歩き回る。周辺地域に特有とされるネイティブ・プランツを集めては種を採取しているのである。さまざまな地域から持ち込まれたネイティブ・プランツが混在する森林地区内にあつて、どれがメルボルンに固有のものかを熟知しながら、セ

ンターで養苗すべきメルボルンのネイティブ・プランツを選別しているのである。このように養苗センターAで養苗されるのは「オーストラリアのネイティブ・プランツ」ではなく、「メルボルンのネイティブ・プランツ」である。

M氏によると1970年代にネイティブ・プランツが注目されるようになった時、多くの人々は各地域の生物多様性(biodiversity)を十分に理解することなく、「とにかくオーストラリアの植物であれば手当たり次第なんでも植えていた」という。しかし現代のM氏をはじめ養苗センターAで働く人々は、いくらオーストラリアといえども各地域には独自の環境があり、その自然に適したネイティブ・プランツを植えなければエコシステムが機能しなくなると考えている。しかも広大なオーストラリアでは同じ州内であっても南北の地域差によっては異なる環境が広がることにも十分な注意を払っているようであった。M氏はそれを「メルボルンらしさ」や「ローカルな風味」という言葉に置き換えながら表現し、メルボルンという特定の土地に適したネイティブ・プランツの養苗を目指している。

1970年代の社会が大きく変化する中でオーストラリアの植物ならばなんでも良かった時代とは異なり、現代のM氏やN氏を中心とした養苗センターAの人々の目は、自分たちが生活する身近なメルボルンの自然へ向けられている。養苗センターAの人々は英国との政治的な駆け引きのなかで求められたナショナルな空間づくりに関心を向けているというよりも、より細分化されたローカルな土地としてのメルボルンがどのような自然のシステムとして機能するのかに関心を向けているようであった。

一方で、養苗センターAの人々と話すなかで気づいたのは、それらの人々がメルボルンの現在のエコシステムにのみ関心を示しているわけではないことである。養苗センターAの人々は土地をめぐるより大きな歴史的認識を持ち合わせてもいた。人々は現代のメルボルンでネイティブ・プランツの養苗に関心を向けていると同時に、メルボルンを含めたオーストラリアという土地そのものに対する関心が高い。以下では、ボランティアとして養苗センターAで働いている人々を中心に、その歴史的認識を分析しながら、それら人々の自己と他者の関係性に思いをめぐらせる様子を考察していく。

#### 4. ボランティア・ワーカーと『ダーク・エミュー』

養苗センターAで働く人々はM氏のような有給職の人を除くと、多くが近隣に住



んでいるボランティア・ワーカーである。ボランティア・ワーカーは火曜日、木曜日、金曜日のいずれかの担当を任せられ、事務所の隣に併設させている作業場でネイティブ・プランツの養苗を行うことになっている。各曜日の作業担当者たちの平均人数は約5人で、実際の養苗を行っているのはボランティア・ワーカーである。ボランティアの顔ぶれは近隣から集まる主婦や、退職した年配の男性、あるいは専門学校で園芸について学んでいる学生たちである。M氏のように有給職を担っている人の場合、事務的な仕事を担うことが多い。

そのボランティア・スタッフの取りまとめをしているのが、前述したN氏である。N氏は週のうちの4日を養苗センターAで働く有給のスタッフである。ボランティアたちは彼女を「ボス」と冗談交じりに呼び、彼女の指示に従う形でほとんどの作業が進められている。事務的な仕事で中心的な役割を担うのがM氏だとすると、苗の採取や養苗など実際の作業で中心的な役割を担っているのがN氏である。

N氏もまた10代の頃からネイティブ・プランツについて知りたいと思い始めるようになった。最初に興味をもったものは「チョコレート・ロリー」(chocolate lolly)と地元で呼ばれているネイティブ・プランツであったという。「チョコレート」という英語の名前を与えられた植物に惹かれて、そのネイティブ・プランツを口にしたいのだと言う。もちろん10代の少女が想像したような甘くて美味しいロリーのような味はまったくしなかったということだが、彼女のネイティブ・プランツへの興味を掻き立てるには十分であったようである。ネイティブ・プランツに興味を持つ人々の幾らかは、食べることのできるブッシュ・フードとしてのネイティブ・プランツから興味を持ちはじめ、ネイティブ・プランツの世界にのめり込んでいったと言う人が多い。N氏以外にも養苗センターAで働く人々の幾人もがそうである。それらの人々によると、それまで身近な存在ではなかったネイティブ・プランツが食べることのできる植物だと分かり、もっと知りたいと思うようになったのだと言う。ネイティブ・プランツを食べることができるといふ思わぬ発見は、メルボルンの人々の目をネイティブ・プランツへと向けさせ、より身近な存在へと変えていったのである。

N氏の両親や祖父母もM氏の祖母同様に自分たちの庭にヨーロッパの植物を植えることに熱心であったと言う。現在のN氏は当時の様子を振り返りながら、それが大いにオーストラリアそのものを変えてしまうことであったと考えている。特にN氏は、オーストラリアという土地がアボリジナルの人々の手が入りエコシステムを大きく破壊

することなく耕作されてきた大地であることを重視しているようであった。N氏はアボリジナルの人々がどのように土地を利用してきたのかについて専門的に学んだわけではないが、その土地に関する知識に興味を持ち続けている。アボリジナルの知識によって培われてきた人間と土地とのバランスが失われるべきではないと強く認識しているようであった。N氏はヨーロッパの植物を集めては庭を作ってきた両親たちのことを回想しながら次のように言う。

それは私たちの暮らしている土地そのものを変えてしまうようなことでした。オーストラリアという土地は常にアボリジナルの人々によって手入れがなされてきたのであり、それはもう一つ別の管理のスタイルでした。

It's about you changing your landscape. Australian land is always managed by aboriginal people, it's different style of management.

N氏はオーストラリアという土地がアボリジナルの人々の手によって作られた豊かな耕作地であったことを指摘しながら、それがヨーロッパから持ち込まれた動植物によって変化してしまい、もともとオーストラリアにあった古くからのエコシステムを破壊させていったと問題視するのである。

確かに近年の新しい研究では、従来は狩猟採集に依存していたと思われていたアボリジナルの人々が、実は様々なネイティブ・プランツを利用しながら農業をおこなう人々であったことが明らかになり始めている。例えば現在のクイーンズランド州にあるケープ・ヨークという地域では、アボリジナルの人々はムーノング(murnong)と呼ばれるネイティブ・プランツを植えて収穫をおこなっていた。これはヤムイモの一種である。その栽培法は種芋となるヤムイモの上部を切り取って、新たに土に植えて塊茎を次々に増やしていくというものである。またヤムイモを育てるには柔らかい土壌が必要となるが、ケープ・ヨークの人々は草むらを火で焼いて広い平地を確保し、道具を使って土を掘り返して手で掬えるほどに柔らかくなるまで耕した。女性は植え付けの季節になると1日に何時間も耕作に精を出し、畑に生える雑草の駆除を入念に行っていたと入植者の報告書等に記録されている(Gammage: 318)。オーストラリアの各地では、このような手入れの行き届いた耕作地が入植者の持ち込んだ牛、羊、豚、馬によって数年の間に破壊されると、それまでの柔らかい土が硬く変化し、雨を地下

に吸い込まずに川に流れ洪水が起こるようになった(Pascoe: 26)。ある入植者の記録では、アボリジナルの人々が栽培していた様々なネイティブ・プランツが姿を消した後の大地には草木が育たなくなったという(33)。さらにアボリジナルの人々は定期的に火を使って森を部分的に燃やしていたが、この火入れによって昨今のオーストラリアに大打撃を与えているような大規模森林火災を防いでいたと言われている。研究者が樹木の年輪分析を行ったところ、ヨーロッパからの入植者がやってくる以前の森に大規模森林火災の痕は見つからなかったと報告された(116)。森への火入れはその他にも、草木の成長を促して動物に住み良い環境を与える効果があった。アボリジナルの人々は動物に棲み家を与えると同時に、狩をして生活の糧としたのである(119)。現在のオーストラリアでは、このようなアボリジナルの人々の農業を含めた土地に関する知識を、アボリジナルの伝統的な土地管理法と呼ぶ。N氏が言う「もう一つ別の管理」とは、上記のアボリジナルの人々が行ってきたネイティブ・プランツを使いエコシステムに上手く対応した土地の活用術を指す。

このようにN氏は養苗センターAで仕事をすることが入植期以来のエコシステムの破壊を食い止める一助になると考え活動を続けてきた。その一方で、彼女が活動のもう一つの動機としているのがネイティブ・プランツを媒介にした土地への「帰属の感覚」(“a sense of belonging”)を感じることである。N氏は自分たちが養苗センターAでおこなっているようなことが、アボリジナルの人々の行ってきた土地への関わり方と異なることを十分に理解しているが、それでも彼女なりのやり方でネイティブ・プランツに関わっていくことがオーストラリアという土地へ帰属しているという感覚を与えてくれると考えている。N氏はアボリジナルの人々とは異なる方法で彼女が土地と関わりを持っていく意味を次のように語る。

でも私が感じるのは、自分たちの暮らす土地に対して敬意を払うことがとても重要であるということ。ここにいるのだという帰属の感覚を感じることは、この土地のエコシステムと共に実際に生きてこそなのではないかと思う。

But I just feel like it's quite important to respect the land you have. To feel a sense of belonging actually work with the eco system that is here.

確かにN氏にはアボリジナルの人々が行ってきたような土地への関わり方を実践す

ることはできない。しかし、それでもなおネイティブ・プランツを通してオーストラリアの土地への敬意を示すことに重要性を見出しているのである。これが彼女が言うところの、この場所で生きているという帰属の感覚を与えてくれるものとなるのだと言う。

N 氏にオーストラリアという土地への理解を深めるきっかけの一つを与えたのは、2014年にブルース・パスコー(Bruce Pascoe)というアボリジナルの男性によって出版された『ダーク・エミュ』(*Dark Emu*)という本である。パスコーは作家として 20 冊の著作を出版している人物で、バス海峡周辺にいたバヌロング (Bunurong) という集団に出自的背景を持っている<sup>6</sup>。パスコーの『ダーク・エミュ』には、上記で説明したようなアボリジナルの人々がどのようなネイティブ・プランツを活用し農業を営んできたのか、および魚の養殖を行った漁業や森の部分的な火入れについての詳細が紹介されている。N 氏以外にもボランティア・スタッフの中には『ダーク・エミュ』の愛読者が幾人もいた。N 氏と『ダーク・エミュ』の話をしていると、作業中の他のボランティア・スタッフたちも手を止め、私たちの話題に加わって大いに盛り上がるほど注目されていた。これらボランティア・スタッフは各々のネイティブ・プランツにたずさわる活動と同様のことが自分たちの知らずと昔より行われてきたことを熱心に語り合い、その事実に対する驚きを互いに確かめ合っているようであった。また『ダーク・エミュ』は N 氏たちの間で話題となっただけでなく、2016年にはニュー・サウス・ウェールズの州知事文学賞で先住民部門の賞を受賞している(Allam, 2019)。オーストラリア版の『ザ・ガーディアン』紙などメディアにおいても広く取り上げられ、オーストラリアの「歴史を書き直した」と高い評価を与えられた(Allam, 2019)<sup>7</sup>。

だが養苗センターAの人々は、アボリジナルの人々とネイティブ・プランツの関係を、異文化の他者に対する単純な「驚き」としてだけ捉えているのではない。そこには植民地主義の歴史を見つめ直す視点も存在していた。長らく養苗センターAでボランティアをしている老齢の男性 G 氏は『ダーク・エミュ』の話をしながら、アボリジナルの農業によって育てられてきたネイティブ・プランツが、入植者が持ち込んできた牛の放牧などによって失われてしまったと話す。G 氏は筆者に「テラヌリウス(terra nullius)という言葉を知っているかい？」と聞いた。テラヌリウスとは所有者のいない土地のことを意味する。イギリスによるオーストラリアの入植史はこの認識を大前提として始まった。誰も所有していない土地であるオーストラリアをイギリスが植民地化することで入植が正当化されたのである。G 氏はこのテラヌリウスという言葉を使い

ながらオーストラリアがヨーロッパ人たちによって「奪われた土地」であることを話し始めたのである。こういった植民地時代の土地の収奪に対する認識は N 氏にも共通しており、彼女は G 氏よりも直接的な言葉である「インヴェイダー」(“invader”)、つまり侵略者という言葉を使いヨーロッパからオーストラリアへとやってきた入植者の歴史を語った。G 氏や N 氏は自分たちの活動を通して常に顕在的に植民地の歴史を認識しているようだった。もちろん N 氏のように明確な言葉で入植の歴史を話す人は少ないが、それでも養苗センター A の人々は N 氏と同じような入植史に対する批判的な認識を共有しているようであった。

養苗センター A で『ダーク・エミュー』の話しに花を咲かせた人々は、こういったアボリジナルに出発的背景を持つパスコーにより書き直された土地の歴史に少なからず影響を受けながら各々の活動に従事している。養苗センター A の人々はネイティブ・プランツに関わる活動の中で偶然にも他者の視点を取り入れながら、自分たちにとってのメルボルンらしい土地の再構築を目指している人々である。

## 5. 養苗センター A の人々からみるオーストラリア

養苗センター A の人々もまたサーウォンカがガーデン・クラブで聞き取り調査をおこなったガーデナーのように、この国がどのような歴史をたどってきたのか、その政治性に敏感である。M 氏の「イングリッシュ・セントリック」という言葉にあるように、彼はオーストラリアの英国中心主義的なあり方に対する社会の変化を子供時代の日常として経験しており、そのことが現在の彼の仕事に繋がった。M 氏はネイティブ・プランツへの興味を通してそれまでのオーストラリアが英国に傾倒しすぎていたことを子供ながらに認識していったのである。だが M 氏はサーウォンカの聞き取り調査に登場するガーデナーが距離を取ろうとした国家に強い愛着心を持つ人々ではない。幼少期の彼はオーストラリアが多文化主義へと変化する社会背景に影響を受けてはいたが、ナショナリズムを喚起させるような国家に対する強い執着心を持っていたわけではなく、またイギリスへの対抗的な意思を表明するためにオーストラリアらしい自然の追求を行っていたわけでもないからだ。特に現在の M 氏にとって重要なことはイギリスとの政治的関係を自然のなかへ反映させることではなく、オーストラリアの各地域で機能するエコシステムへ目を向けることである。

また、N 氏や G 氏はアボリジナルの人々がおこなってきた農業について語りなが

らも、植民地時代よりオーストラリアにおいておこなわれてきた土地の収奪 (dispossession)、あるいは強制的な移住としての転移(displacement)について話をしている。つまり現在の彼らが熱心にネイティブ・プランツを植える土地が、そもそもの始まりとしてアボリジナルの人々から奪われたものであることが明言されたのである。入植期のはじまりよりヨーロッパからの移民を含むさまざまな動物や植物がオーストラリアへと持ち込まれることで、現代の彼らが育てるネイティブ・プランツが本来の居場所を追いやられて来たことが語られたのである。また同時に彼らの語りの中には、ネイティブ・プランツの強制的な移動だけではなく、パスコーが描いたようなアボリジナルの土地や植物に関する知識の収奪も暗示されている。ヨーロッパから牛を持ち込んだ人々によって畜産業が始まると、アボリジナルの人々は自分たちの所有していた農地を追われ、彼らの農業は途絶えてしまったのである。特に N 氏の発した「インヴェイダー」という言葉は、その暴力的な収奪および転移の入植史を最も完結にそして最も直接的に捉えていた。そしてパスコーが著作の中で蘇らせたのは、そういった途絶えて久しいアボリジナルの土地や自然に関する知であった。

こういった養苗センター A の人々の様子をグリフィスは「白い先住民の文化」といって批判するかもしれない(173)。先述のとおりグリフィスはヨーロッパからの入植者たちがアボリジナルの人々に関連するイメージを象徴的に利用することで、彼ら自身のオーストラリアという土地との親密な土着性を意図的に創造してきたのだと批判的な議論を展開した。確かにグリフィスはヨーロッパからの入植者たちが暴力的な植民地の真実を隠蔽しながら、オーストラリアを自らの所有物とする過程を見事に描いている。彼の議論には他者の土地を収奪した上に成り立っている入植者の生活が、場所の名付けや自然への愛着を「発明」(“invention”)していく中で徐々におこなわれてきた様子が批判的に描写されており異論の余地はない。この白い先住性の構築は今後もオーストラリアの入植史を考察する上で最も重要な論点の一つとなるだろう。

ただ、グリフィスが批判の対象としてきた人々と養苗センター A の人々を混同することはできない。筆者が調査をおこなった養苗センター A の人々は、確かに土地収奪の延長線上に生きている人々ではあるが、彼らがネイティブ・プランツを媒介にして間接的に経験しているのは、アボリジナルの人々から奪取し彼らの土地との伝統的な関係を消滅させた歴史でもある。彼らはグリフィスが描き出した「アボリジナルになる」という願望をもった人々ではなく、現在の自分たちの活動がアボリジナルの歴

史の上に成立していることを日常的に喚起させている人々なのである。換言すると、グリフィスの批判する人々が土地との関わりを利用しながらオーストラリア人としての自己同一性を構築しようとした人々であったとするなら、養苗センターAの人々はオーストラリアの暴力的な入植史を再帰的に考察しながら自分たちの活動を続ける人々である。

---

<sup>1</sup> グリフィスは、20世紀初期のヨーロッパ系オーストラリア人たちにとって、大陸内陸部への旅が新たな意味を持つものになっていったことに注目し、そうした旅を「巡礼」(pilgrimage)と呼んでいる(174)。特に「セントラル・オーストラリア」(Central Australia)あるいは「レッド・ハート」(Red Heart)と呼ばれる大陸中央部への旅が多くの人々を駆り立てたという。

<sup>2</sup> また1934年には『ウォークアバウト』(Walkabout)と呼ばれる雑誌が刊行され、セントラル・オーストラリアへの旅がアボリジナル・アートと共に紹介され、ヨーロッパ系オーストラリア人たちの数々の英雄的な探検物語と一緒に内陸部の写真が収められた(Griffiths, 177)。

<sup>3</sup> ヴィクトリア州の中心地であるメルボルンでは「ヒストリカル・ソサイエティ・オブ・ヴィクトリア」(historical society of Victoria)と名付けられた組織が作られ、1910年から1930年の間に百を超える数の石碑や彫像が建てられている。それらは入植期の探検家たちのブッシュへの旅を広く紹介するために建立されたものである(Griffiths, 158)。

<sup>4</sup> メルボルンでは様々な組織が誕生し、都市で暮らす人々にそれまで馴染みのなかったオーストラリアの自然を熱心に紹介している。それら組織の中にはナショナリズムを高揚させるような「マイトシップ」(Mateship)をブッシュの中に見出すものもあれば、当時すでに都市となっていたメルボルンのタウン・ホールで毎年のように催しを開き、普段は目にする事のないブッシュの自然を再現して子供たちにポッサムなどオーストラリアの動物たちを紹介している(172)。

<sup>5</sup> N氏に出自的背景を聞くとアイルランドやスコットランドであると答えてくれたと共に、「50%がオーストラリア人だよ」とも答えてくれた。これは多くのヨーロッパ系のオーストラリア人たちに共通する答えである。すでに何世代にも渡りオーストラリアに暮らす人々にとって「あなたの出自的背景は？」と聞くと、「オーストラリアだよ」と返すのが普通なのである。そういった場合、こちらからさらに詳細を求めると、祖母がアイルランドからやってきたとか、祖父母がドイツからやってきた移民だというふうに細かい情報を答えてくれる。

<sup>6</sup> パヌロングは伝統的にモーニントン半島、パス海岸、南ギップスランドの辺りに暮らしていた人々である。現在では Bunurong Land Council Aboriginal Corporation などの組織を作り土地や文化の管理および維持のための活動をしている。Australian Government Online を参照のこと。

<sup>7</sup> またバスコーは2018年にはシドニーで収録された世界的に有名な教養番組 TED×Sydney にも登壇し、自身の著作中に描いたアボリジナルの農業について聴衆の前で講義を行なっている。

<参考文献>

- Allam, Lorena. “Dark Emu’s infinite potential: Our kids have grown up in a fog about the history of the land.” *The Unmissable. Guardian Australia*. 23 May 2019.  
<https://www.theguardian.com/books/series/the-unmissables> 20190801
- Australian Government Online. News and Reports*, “Stronger than ever, together.”  
<https://www.oric.gov.au/publications/spotlight/stronger-ever-together> 20191224
- Boyce, James. *Van Diemen’s Land: A History*. Melbourne: Black Inc, 2009.
- Cerwonka, Allaine. *Native to the Nation: Disciplining Landscapes and Bodies in Australia*. Minneapolis: University of Minnesota Press, 2004.
- Clarke, Marcus. “Preface,” in Adam Lindsay Gordon’s *Sea Spray and Smoke Drift*. Melbourne: Clarson, Massina & Co., 1876, v-vi.
- Gammage, Bill. *The Biggest Estate on Earth: How Aborigines Made Australia*. Sydney: Allen & Unwin, 2011.
- Griffiths, Tom. *Hunters and Collectors :The Antiquarian Imagination in Australia*. Cambridge: Cambridge University Press, 2009.
- Hage, Ghassan. *Alter-Politics: Critical Anthropology and the Radical Imagination*. Melbourne: Melbourne University Press, 2015.
- McKenna, Mark. *The Captive Republic: A History of Republicanism in Australia 1788-1996*. Cambridge: Cambridge University Press, 1996.
- Pascoe, Bruce. *Dark Emu: Black Seeds, Agriculture or Accident?* Western Australia: Magabala Books, 2014.
- Wilding, Michael. “Weird Melancholy: Inner and Outer Landscapes in Marcus Clarke’s Stories.” *Studies in Classic Australian Fiction*, 1997, 9-31
- 有満保江 『オーストラリアのアイデンティティ: 文学にみるその模索と変容』、東京大学出版会、2003年
- 竹田いさみ 『物語オーストラリアの歴史: 多文化ミドルパワーの実験』、中公新書、2000年
- 前川真裕子 「オーストラリアの反捕鯨思想と人々の考える『理想的なオーストラリア』」、国立民族学博物館研究報告 42(1)、2017年、1-48頁